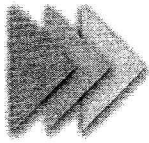


救える命があればどこへでも

国際医療ボランティア AMDAのとりくみ

第6回



難民一人権

菅波 茂 [AMDA 代表]

“UNHCR” との難民救援活動

難民とは国家の発行するパスポートが無い人たちである。国家の保護が受けられないことを意味する。世界中には約2～3000万人の難民がおり、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が基本的な対応をしている。

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖大地震・津波被災者救援活動にUNHCRが関与した。珍しいことである。何故か。インドネシア国軍と独立アチェ運動 (GAM) との長年の紛争によって一部の住民が難民として隣国のマレーシアに避難し、UNHCRの保護下にいたためだった。もう1つの理由はUNHCRが大量の難民の世話を慣れていることだった。住居、食糧、水、医療などの提供である。

バンダアチェの木で作られていた住民の建物は、ジェット機並みのスピード (時速約700km) があつたのではないかとされる津波によって、コンクリート造りのモスクなどを除いて軒並み粉碎された。熱帯の雨季は厳しい。毎日毎日豪雨が大地を叩きつける。身体

を守る住居をどうするのか、最大の課題であつた。UNHCRや国際移住機関 (IOM) が手腕を発揮することになり、UNHCRが自然災害被災者復興支援活動に関与する珍しい事例となった。

AMDAはバンダアチェの復興支援活動を行うと共に、UNHCRの実施機関としてニアス島で住宅建設を行っている。ニアス島はバンダアチェが津波に襲われたわずか3ヵ月後に地震に襲われた。津波の記憶が鮮明な時に地震が加わって、島中が不安と恐怖でパニックになった。AMDAは地震発生後2日目にインドネシア支部の医療チームがニアス島で唯一の総合病院に到着して、被災者に対して外科手術などの医療支援を開始して評価を得た実績がある。住民の間にAMDAの名前は浸透していた。

パスポートには2種類ある

1995年から3年間にわたる旧ユーゴスラビア難民救援プロジェクトで、わかつた事実が2つある。まず簡単にAMDAが関わったプ



コソボ難民緊急救援プロジェクト（コソボ自治州）1999年
コソボの帰還難民と被災民及び地域住民を対象に医療活動を実施。診療所再建、医療備品・薬品の援助

プロジェクトを紹介する。

■ボスニア内3ヵ所で被災民、帰還難民を対象に医療支援、生活改善支援、職業訓練などを実施 ■バニャルカ、ゴラジュデにおいて診療、医療物資支援 ■ボスニア地区の医師を対象にした専門技術向上のためのトレーニング

わかった事実の1つは「パスポートには2種類ある。国家が発行するパスポートと家族写真」である。ムスリム系、セルビア系、クロアチア系の三つ巴の内戦だった。まさに不条理の世界だった。誰にも説明ができない。しかし、現実には事実だった。仲良く民族と宗教を超えて暮らしていた隣近所が敵になった。それだけ憎悪は激しかった。親子離散は当たり前だった。どのグループからも大量の難民がでた。家を棄て、家具を棄て、家族も離散する避難の旅だった。

しかし、宗教や民族を超えてどの難民も最後まで大切にしていたのは家族写真だった。彼らとの信頼感形成は彼らに自分の家族写真を幸せそうに説明できるか否かが勝負である。幸せそうに説明できない時に彼らは不信感を持つ。「何故、あなたはここに来ているのか」と。不幸せな人は他人の幸せを望まない。他人の

不幸せを見つけて自らの不幸せを慰める。難民はその1点を凝視している。その1点とは家族写真を説明する時の私たちの表情である。

もう1つは「人権は言葉でなく行為にある」ことである。AMDAは人権を「存在を認めること」と定義している。具体的には「あなたを忘れていません。あなたに関心があります。あなたを必要としています」である。

どのグループの女性にも共通したことがあった。編物である。AMDAはすべてのグループの女性に色とりどりの毛糸を寄贈するプログラムを作った。本当にわずかなお金だった。編まれたセーターなど作品を販売した。その収益金で毛糸を購入して寄贈した。これほど女性に喜ばれたプログラムはなかった。「あなたを必要としています」というメッセージを女性に送ったプログラムだったからである。そして「あなたを見捨てていません」というメッセージでもある。

「あなたを見捨てていません」を どう表現するか

旧ユーゴスラビアの難民のうち国際社会で一番孤立していたのはセルビア系だった。ムスリ



旧ユーゴスラビア難民救援プロジェクト 1995～97年
ボスニア内3カ所で被災民、帰還難民を対象に医療支援、生活改善、職業訓練等を実施

ム系及びクロアチア系のボスニア・ヘルツェゴビナ政府に雇用された米国の広告会社の戦略により「民族浄化」を行っている極悪卑劣なグループのイメージを着せられたからだ。セルビア系はボスニア・ヘルツェゴビナの一角に「スルプスカ共和国」を樹立していた。1996年に内戦終了後の復興のために、AMDAは四人の医師を医療研修のために日本に招聘した。北海道、長野、広島、沖縄の四カ所で医療研修をしてもらった。医療機関での研修、ホームステイ、講演会、交流プログラム等々。多くの日本人と交流し、友だちもでき、彼らの孤立感は解消された。彼らから申し出があった。「AMDAボスニア・ヘルツェゴビナ支部を設立したい」と。

1999年コソボ紛争勃発。AMDAはギリシャのテッサロニキからアルバニアを経由しコソボに医療チームを派遣した。多くのセルビア系コソボ人がコソボを追われ難民となってユーゴスラビア連邦共和国（当時セルビア、モンテネグロの二共和国で成立していた）の首都ベオグラードに避難した。AMDAボスニア・ヘルツェゴビナ支部に「AMDA本部と合同医療チームをベオグラードに派遣すること」を要請すると「喜んで医療チームを派遣したい」と返答の

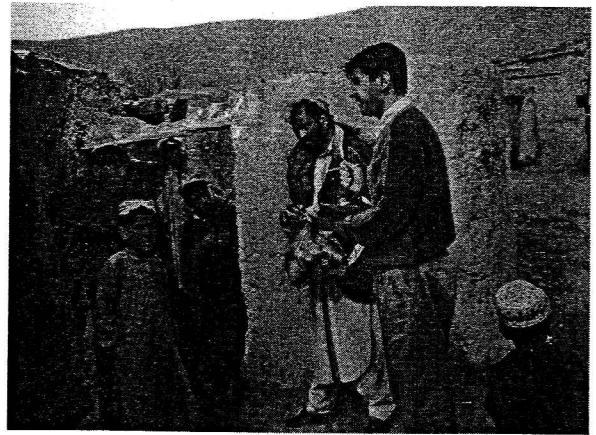
ファックスが入った。精神科医が主体のチーム構成で、セルビア系難民の絶望を癒すことが最大のミッションだった。難民の痛みがわかる難民による医療チームとして画期的な活動だった。

難民に対する支援活動に対して国家ができることと民間ができることの違いがある。NGOなどに代表される民間は対人サービスに特徴がある。対人サービスの極限は「あなたを見捨てていません」である。「あなたを見捨てていません」をどのように表現するのか、できるのか。旧ユーゴスラビアの女性たちにとっては編物だった。ではチベット難民、ブータン難民、ソマリア難民、チェチェン難民、スーダン難民、パレスチナ難民にとっては。善意だけでは何もできない。そのカギは文化である。文化とは集団の価値判断であり、慣習である。「あなたを見捨てません」というメッセージを相手の文化に具体的に託す経験と智慧の探求こそNGOに不可欠である。

スマトラ島沖大地震・津波被災者救援活動の特徴は、難民に対してUNHCRが果たすような、救援活動を統括する司令塔が無かったことである。各国政府、NGOそして国連諸機関の被災者救援活動はばらばらだった。ユニセフ



ソマリア・エチオピア難民支援プロジェクト (ジブチ) 1992年～現在
難民キャンプで緊急救援医療を開始。現在は3つのキャンプで、診療所での診察、母子保健(分娩助産、妊産婦健診、避妊対策普及、乳幼児成長発達観察)や予防接種、栄養改善のプログラムを実施



アフガン難民帰還プロジェクト (パキスタン) 1998年～現在
アフガン難民キャンプで、保健医療サービス、診療所の運営と重症救急患者移送(リファー)システムを運営

は子どものケア。世界保健機関(WHO)は疾病情報。国連人道問題調整事務所(UNOCHA)は災害情報。米国やオーストラリアなどは軍隊を独自に救援活動に導入。シンガポールやマレーシアなどの近隣諸国は軍の医療チームを独自に派遣。遠くからはデンマークなども医療チームが到着。支援形態は多彩を極めた。

世界中のNGOが駆けつけた。司令塔無き相互連絡でそれぞれのやり方による救援活動が進められた。混乱の中で、欧米のキリスト教系NGOによるイスラム教の被災者に対する改宗運動があり、これに対してイスラム過激派グループがジャワ島などから乗り込んできて対抗するなど宗教的にも緊張状態が生まれた。一時はインドネシア政府が独立アチェ運動(GAM)との緊張状況の中で、他の国の軍隊による支援撤収を要請したこともあった。

アチェには油田をはじめ豊かな資源があったため各国の利害が錯綜していた。結果的には、フィンランド政府の仲介によりインドネシア政府と独立アチェ運動(GAM)は和平締結をした。災いを転じて福となす。めでたしである。

バンダアチェの被災者が一番望んだのはコ

ミュニティセンター(集会所)で、メッカに向かっ
ての礼拝と住民同士の対話ができる場所だっ
た。イスラム教徒として見放されていないこと
の確認と住民同士の連携による存在の相互確
認である。巡回診療への強い要望もあった。
健康という現実的な必要性だけでなく外部から
見放されていない気持ちが大きかったと思う。
AMDA インドネシア支部が医療チームを編成
してくれた。医学は科学であるが、医療はコミュ
ニケーションである。外国人医師の参加は言葉
の壁があっても「あなたを見捨てていません」
というメッセージとして大きな意義がある。

UNHCR との難民救援活動

■ザール：ルワンダ難民救援(1994～96) ■モ
ザンビーク：ガザ州帰還難民緊急救援・ガザ州地域
総合振興プロジェクト(1994～97) ■アンゴラ：
アンゴラ帰還難民救援(1995～98) / アンゴラ
国内避難民救援(2000～02) ■ルワンダ：ペーパー
チューブ難民テント建設プロジェクト(1998～99)
■ジブチ：ソマリア・エチオピア難民支援プロジェ
クト(1992～現在) / 難民帰還プログラム(2002～
現在) ■ネパール：AMDA 病院プロジェクト(1992
～現在) / ブータン難民キャンプ内プライマリヘル
スケアプロジェクト(2001～現在) ■パキスタン：
アフガン難民帰還プロジェクト(2002～現在)